

破提宇子

夫、提宇子門派、初入の人に對しては七段の法門あり。其初段の所詮と云は、天地万像を以て能造の主を知り、四季轉變の時を違へざるを以て其治手をしる。譬へば一字の殿閣を見ば、其巧匠あることをしり、家内に壁書あつて、其旨に隨て家中治まるを見る時は、必主人あることを知は常の習なり。去れば天もなく地もなく、一物なかりし空寂の時ありしに、此天地出現し、天には日月星宿光を放つて、明歷々として東涌西没の時をたがへず。地には千草万木あつて飛花落葉の節をあやまたざるは、能造の主なくんばあるべからず。此の能造の主をテラスと號すと云へり。

破して曰、一本曰テ云ニ作ル是何の珍しきことぞ。諸家何れの所にか此義を論ぜざる。有レ物先ニ天地ニ。無レ形本寂寥。

能爲ニ万像主ニ。逐テ四時ニ不レ凋とも云、天何をか言哉、四時行焉、百物生焉スともあり。其外佛法に

は、成住壞空の次第を以て此義を論じ、神道には、天神七代、地神五代と神代を分つ。就レ中天神七代の始め、國常立尊、國狹槌尊、豐斟淳尊、三はしらの神在一本ハシラノ三字ナシまして天地開闢し玉ふ。常に立て國

を治め玉ふ故に、國常立尊と申奉る。何ぞ提宇子の宗ばかりに、天地開闢の主を知たるがほに、くどくどしく此義を説や。言多きものは品少し。閉口しざる。一本ルテリニ作ル

提字子云、此^{デラス}はインピニイトとて、始もなく終もなく、スピリツアルス、タンシャとて、色形なき實體、ラムニボテンとて万事に叶ひ、サゼエンチイシモとて、上なき智慧の源、ジエスイシモとて、大憲法の源、ミゼリカウルヂイシモとて、大慈大悲の源、其外諸善万徳の源なり。佛神は皆人間なれば、件の徳義備り玉はず、生死を受玉へば、なんぞ天地作者と云んやとなり。

破して云く、佛神を人間とばかり見は、無學の人の邪見、尤も提字子に似合たる見計なり。夫諸佛は法報應の三身在す。應化の如來は、衆生濟度利益方便の爲には、八相を成じ玉ふといへども、法身如來、無始廣劫より本有常住の佛にて在ませば、言語道斷にして是とも非とも手のつかざる法性標カ法身の本佛なり。故に經にも如來常住無有變易とも説れたり。人間とのみ思ふは愚痴の凡夫なり。

又神も人間なりと云は右に同じき無學なり。かけまくも忝や、神には本地垂迹の謂れ在ます。譬へ

ば天満大自在天神は、御本地大悲の觀世音に在ませども、光を和げ塵に交り玉ふ時は、一本リタルニ作ル菅相亟と顯

れ、迹を北野に垂玉ひ、百王鎮護の神と祝はれ玉ふ。何しの大社宗廟の神にか此理在まさる。加

之、國常立尊と申し奉るは、天地未開闢、人間一人もなかりし以前よりの神にて在ますをも、人間

なりと申さんや。言ふことなかれ、言ふこと勿れ。知るをば知るとし、知らざるをば知らずとせ

よ。神と申すをば、至聖の孔子だにも、使^ラ天下之人。齊明盛服。以承^ラ祭祀。洋々乎^ト如^カ其在^ニ其上。

如^カレ在^ニ其左右^ニ一矣と宣玉ふに、盲人蛇にをじずとやらんに、提宇子の口にかけて何かと申すは、怖

し々々、誠に舌を拔るゝの業を招く者なり。日本は神國、東漸の理に依ては佛國とも云べし。されば

にや、佛を駟^ア詈する提宇子は、當來を待に不^レ及、現世にても佛罰神罰を蒙るべきこと、踵を回らす

べからず。人の名をも知ざる者共は、不^レ違^{アル}レ數^ニ。看々、豐後の大友宗麟は佛神に歸依せられし程

は、威を九州に振ひ、名を西海に飛ばせられしかども、提宇子の門徒と成られし後は、武運も忽につ

き、嫡男義統諸共に向へ打越へ、志摩津と戦ひしに、耳川の一戦に討負け、單孤無頼に打なされ、

ほらゝ、國に歸り、其後は宗門次第に衰弊し、今日に至までは累代繁榮の豪家ながら、子孫つきて

在かなきかのていたらくなり。又小西攝津守も提宇子の張本たりし故に、佛神の加護なく、三成が

非道の謀反に與し、大路を渡され、首を刎られ、從類悉く絶え子孫残らず。又高山右近も提宇子の

棟梁たりしが、其子孫いづくにかある。明石掃部も提宇子宗と成て、家を失ひ身を亡しぬ。又京洛

の中に於て桔梗屋ジュアンと云し者の一類、泉南の津にては日比屋の一黨は、商家ながらも提宇子

の大檀那にてありしが、此等の一族多は死然を得ずして亡びにき。此等の子孫、今何れにかある。是

皆眼前に諸人の知所なり。斯の如く義を聞ながら、猶も佛を人間なりと云ば、たとへば釋尊の淨飯

大王を御父とし、摩耶夫人を御母として誕生の相を現じ玉ひ、鶴林の御入滅を唱へ玉ひ、八幡大菩薩

一本子ノ下ツレノニ字アリ

一本佛ノ下脚ノ字アリ

一本西ヲ四ニ作ル

一本討ヲ懸ニ作ル

一本衷ヲ衰ニ作ル

一本三ヲ光ニ作ル

一本屋ノ下ノノ字アリ

一本然ヲ善ニ作ル

一本佛ノ下脚ノ字アリ

の仲哀天王を御父とし、神功皇后を御母として生れ在ます體の義を以、人間なりと思ふと見えたり。

一本王ヲ皇ニ作ル

然らばジヨセイフを父とし、サンタマリヤを母として、提宇子の本尊ゼズキリシトも誕生すと云ふ時は、是こそ人間のたゞ中よ、此方には人を天地の主しとはせずと云ふことなり。

提宇子の云く、ゼズキリシト因位の處は、本より人間にて、神の垂迹の因位に異ならざれば、此段

一本因ノ上モノ字アリ一本位ヲ住ニ作ル

一本垂迹ノ下佛ノ字アリ

は互に暫くさしおく。神の本地も佛なれば論ずるに不し及。法性法身の處と叻とたくらべ看よ。叻

デウス

は右に云し如く諸善万徳の源なり。法性は無智亦無徳と説く。然らば無智亦無徳の處より、如何として此天地万像を造作せん。其上今日の我等にある慮智分別は、本源に智徳あらずんば何としてかあるべき。

破して云、提宇子は眞理を辨へず。法性は無智無徳と聞ては不可也と思て捨レ之。叻に智徳ありと

デウス

聞ては可也と思て取レ之。さて、我汝に眞理を説て聞せん。先無の一字にも不可思議の謂れあり。

無字鐵關千万里。誰拔カテ。這字ヲ徹スト那邊ニとあれば、無の一字も提宇子底の人の知べき義にあらず。よし

一本此ヲ重ニ作ル

又無智亦無徳の語、字面の如くにもせよ、無智無徳こそ眞實なれ。叻デウスを有智有徳と云は落居すべか

らず。總じて智慧ある處には、憎愛簡擇は人間の氣也。憎愛ある叻デウスならば、共に量るに不し足。猶

一本處ニハ下憎愛簡擇ナクテ味ハズノ字アリ

此理をば後にも教ゆべし。去れば法性は大海の如く、是非有ことを説すと云こそ眞實なれ。又叻デウスは

有徳と云て是に誇る。猶又一毫未斷の凡夫の説也。上徳は不_レ徳、是以_ナ有_レ徳と、人の上にさへ云ふなるに、_而には是々の徳ありと云は、却て不足千万、老子の夷_{色無}希_{音無}微_{形無}之三字を擧て、此の三の者は語することを致すべからず。右の三の者は見る事も得ず、聞ことも得ず、取ることも得ず、言語道斷にして、書にも傳へられずといへるこそ然べけれ。_而には智慧分別あれば、法性に越たりと云へるは笑に不堪。虚靈不昧の理をば、汝知るべからず。

提字子又云、本源に智徳なくんば、如何として人間にある慮智万像に備る。徳義はいづくより出たるぞ。此理を以て見る時は、本源に智徳備はずんばあるべからず。

破して云、柳は緑花は紅、是は只自然の道理なり。柳の根を碎て看よ、緑もなく、花の木を破て看よ、紅もなければども、自然天然の現成底也。年々に咲や吉野の山櫻木を破てみよ花のあるかは。根元になき物の枝末にあるは常の義也。道生_一。一生_二。二生_三。三生_三万物。虚靈不昧の本源より陰陽生じて、清濁動靜の氣備り、天地人共に万物を生じ、我等が慮智分別、鳥獸の飛鳴走哮、草木の開花凋零、皆是二氣の轉變、清濁動靜に隨ふ。古往今來の千聖万賢、此理を述ずと云ふことなし。孔子をこえ、老子に勝る、提字子にてあるべからず。蔓頭の葛藤截斷し去る。

二段

提字子云、此^{テウス}是現當二世の主、賞罰の源也。されば主はありても、現在の善惡の業により、當來にて賞罰に預るべき者は、何ぞと云ふことを知ずんばあるべからず。總じて色形ある物は、人畜艸木皆終ありて、焼ば灰、埋めば土と成、後生にいき残て苦樂を受ん者は何ぞと教ゆべし。然れば精魂に品々あり。先草木の精をば、アニマベゼタチイワと云。アニマベゼタチイワと云は、生成榮枯、飛花落葉の用のみ備へたる精命と云ふ義也。又禽獸の精命をば、アニマセンシチイワと云。アニマセンシチイワとは、生成の用のみならず、知覺運動等の用を具したる精命也。喩へば鳥雀の鷹を見ては己が敵也としり、飢渴痛痒等を覺ゆる精命なり。右二のアニマは、色相より出て色相のみに當る用をなす精命なれば、色相の四大に歸る時は、つれて滅する命根なり。さて人間の心をば、アニマラシヨナルと云。此ラシヨナルと云アニマは、右二のアニマの用のみならず、是非を分別するをラシヨナルアニマと云也。此ラシヨナルアニマは、色相より出ず、却て色相を制し、スヒリツアルス、タンシヤとて、無色無形の實體なり。色相より出ずと云ふ道理は、人間も色相ある者なれば、飢渴寒暑を覺るは禽獸に違はず。然れば飢に臨では食せんことを欲すれども、茲にてくらはゞ耻辱也と思ふ時は死すれどもくらはゞ思はず。又戰場に於て身は退かんことを思へども、逃て後に指をさ、れんよりはと義理を思ひて、いやがる身に我と討死をさするを以ても、アニマラシヨナルは色相よ

一本レラルニ作ル

り出ず、^{デウス}而より一身の主と作り玉ふと云處明かなり。然れば色身各別のアニマラシヨナルなるが故に、色身とつれて滅せず、後世に生殘て、現世の業に隨て、永劫不退の苦樂にあづかる者也。其善所をばハライソと云て天にあり。惡所をばインヘルノと云て地中に在者也。

破して云く、右三品のアニマを擧て銘々に名付、各々に之をとく。就^レ中人間のアニマはラシヨナルとして色身より出ず。而より各別に作られ、現世の業に隨て、後生にて苦樂を與へらるゝと云ふ。あゝ哀なるかな、提宇子の眞理を知ざること。あゝ悲ひ哉、吾朝の凡夫此異端に惑せらるゝこと。

我眞理を説て汝に聞せん。總じて万物に事理の二あり。這事あれば此理なくて叶はず、此理を賦命と云。千差万別の物ありといへども、^{一本ニオハニ作ル}理に二もなく三もなく、唯一の理也。用の差別は事の品々に隨ふ。一味の雨は理、千差の器は事也。譬へば天油然として雨を降すに、諸器を出して是をうく。

雨水には長短方圓の相もなく、香臭の氣もなく、清濁の義あらず、甘苦等の味もなしといへども、方圓、五味、香臭、清濁等も、皆器の方圓、善惡、淨穢のまゝに任す。去れば賦命も亦如^レ斯。氣質の清濁厚薄の不同に依て、用も同じからず。何ぞ、ベゼタイワ、センシチイワ、ラシヨナルなど、其理を各々に分だんや。別して人間の心は、アニマラシヨナルと云て、各別の物なる故に、身欲を制すると云を究竟の理として、諸家には不^レ知^レ之と思へり。誠に管見の第一也。儒家には氣質の

欲を人心と云ひ、義理を道心と云。此段に於て、儒門にも善盡し美盡せること、提字子、夷狄の曲説の及ぶ所にあらず。人心惟危、道心惟微也と云、此義也。さて佛法には心意識の三を擧て論ずること精しからざるに非ず。不起一念の處は、心王不動の妙體なり。一念の私欲起るは意也。猶も綠紅と細碎工夫するを識と云。譬へば同じ火なれども、火焰熾の三の如し。去れば是程諸家に云盡したる義をば知ずして、珍し良にアニマセンシチイワの、アニマラシヨナルのなど、唐人の寢言のやうなる事を云て、愚人を誑かすは曲事なり。猶又アニマラシヨナルには、今生の業によりて、後生にて苦樂を興へらるゝと云ふ。かゝる無道を行ずるを誑と云ふや。人主に於ても謗るべし。夏の禹は即位し玉ひて後、罪人を見て車より下て泣て曰く、堯舜之人は、堯舜之心を以て心とす。寡人、君と爲て、百姓各自ら其心を以て心とす。寡人之を痛むと自ら責玉ふ。商の湯王七年の大旱に、民苦めば、大史占て人を以て禱るべしと奏すれば、是皆吾が罪による天災なり。民の科にあらずと思召し、自ら犧とならんと、素車白馬にして、身嬰^テ白茅^ニ以犧^テ性と爲て、桑林之野に禱る。六事を以て自ら責て曰く、政節ならざる歟、民職を失する歟、宮室崇き歟、女謁盛んなる歟、苞苴行なはるゝ歟、讒夫昌んなる歟。言未だ已ざるに大雨^{ニル}方數千里。又莊山之金を以て幣を鑄て、民の命を救ふ矣と、傳記に載る處なり。人主だにも聖主賢君は猶如^レ斯。然るに誑は、誰が頼み誰がやと

ともなきに、無量恒沙の人を造り、地獄に墮し、一日一月の間のみか、不退永劫の苦に苦を受かさねさするを、大慈大悲の昀と云はんや。大慈大悲とは苦を抜き樂を與ふ、是を云ふぞ。

三段

提宇子の云く、昀デウスはスヒリツアルス、タンシャとて、無色無形の實體にて、間に髪をいれず、天地いづくにも充滿して在ませども、別して威光を顯し、善人に樂を與へ玉はん爲に、ハライツとて、極樂世界を諸天の上に作り玉ふ。其始め人間よりも前に安女アンゼルスとて、無量無數の天人を作り、いまだ尊體を顯し玉はず。上一人の位を望むべからずとの天戒を定め玉ひ、此の天戒を守らば、其功徳に依て昀デウスの尊體を拜し、不退の樂を極むべし。若又破戒せばインヘルノとて、衆苦充滿の地獄に墮し、毒寒毒熱の苦患を與ふべしとの義なりしに、造られ奉て、未だ一刻をも經ざるに、即無量の女の内にルシヘルと云へる安女、己が善に誇て、我は是昀デウスなり、我を拜せよと勸しに、かの無量の安女の内、三分が一はルシヘルに同意し、多分は與せず。茲に於て昀デウス、ルシヘルを初とし、彼に與せし三分一の安女をば下界へ追下し、インヘルノに墮せしめ玉ふ。是即安女高慢の科によりて、チャポとて天狗と成たる者なり。

破して云、汝提宇子、此段を説こと偏に自業自縛なり。先昀はいづくにも滿々て在ますと云は、眞

如法性本分の天地に充塞し、六合に遍満したる理を聞はつり云ふかと覺へたり。似たる事は似たれども、是なることは未だ是ならずとは、如レ此のことをや云べき。さて汝云はずや、一本エラアニ作ル 叀はサヒエンチイシモとて、三世了達の智也とは。然らば彼女安を造らば、即時に科に落べきと云ふことをば知らずんばあるべからず。知らずんば三世了達の智と云へるは虚談なり。又知りながら作りたらば、慳貪の第一也。万事に叶ふ叀ならば、安女の科に墮ざるやうには何とて作らざるぞ。科に落るを儘に任せ置たるは、頗る天魔を作りたる者也。無用の天狗を造り、邪魔をなさするは何と云ことぞ。蓋し^{デウス} 叀の造りそこなひか、但し又安女は天地万像を造りたると云ふ、其こけらくづにてインヘルノの猛火にくべたる歟。呼々大笑。

四 段

提字子云、^{デウス} 叀、天地森羅万像を造り終り玉ひ、万物の靈長として人間を作り玉ふ者なり。但し人間初めより如レ此無量無數に造り玉ふと云にはあらず、阿檀夫慧和婦とて、夫婦二人を作り玉ひ、万の智慧分別を勝れて與へ玉ひ、ハライツテレアルとて、地上の極樂世界に置玉ふ。一本ソノ福源ナシ以下同 このハライツテレアルと云へる所は、不寒不熱にして衆苦を離れたる所なり。阿檀、慧和、この所に居られし程は、貧苦病苦と云ふこともなく、如意満足にして千苦万苦、一本万苦ヲ万時ニ作ル あたりへも近付ざる者也。茲に於て叀又一戒を

アダン、エワに授け玉ふ。諸木諸艸の實をば食すると云とも、マサンと云ふ菓實をば食すべからず。此戒を持つに於ては、アダン、エワの事は云ふに不_レ及、子々孫々に至るまで、不老不死、如意満足にして、時節を定め、又上天ハライゾへ召上げ玉ふべし。但し又破戒の人とならば、ハライゾテリアルをも追放し、死苦病苦を初として衆苦を身に受け、上天ハライゾへも召上らるべからず。終にはインヘルノとて、地獄に墮在すべしとの義なりしに、件のルシベルと云へる天狗、人間このまゝにてあらば我失ひたるハライゾ、上天の位階を奪はるべきことを妬み、ハライゾテリアルへ窺ひ入れ、女のエワに勧めて云、何とて此マサンの菓子をば食せざるぞ。是は三世をしる智慧の菓子にて、是を食へば^{デウス}の如く成故に、^{デウス}の如く人をなさせらるまじき爲に戒め玉ふぞと云へば、エワ即これを食ふ。夫の阿檀も同く食して天戒を破りし故、ハライゾテリアルをも追出し、今この子孫の我等に至るまでも、死苦病苦を先として艱難こゝに極り、剩ヘインヘルノに墮さるべき身となりたる者也。破して云、正理には背きしと云へども、初め一段二段までは、ちとをとなしげもありつるが、三段より此段をきけば、淺より深に入にてはなく、漸々淺まになる。是より奥猶思ひやられたり。先思ひても見よ、天戒と云其名は貴に似たれども、戒法の品こそあるべきに、マサンの菓子とて、あまほしのやうなる物を食すること勿れとは、誠に笑具の第一なり。老婆を誑し、小兒の泣をすかすには似合

たり。上天得菓、地獄墮在の一大事の因縁とするに、あまぼしは不足なり。五戒十戒、律家の諸戒の内にもあまぼしを戒められたりとは聞ず。古蜂屋入道このマサンの談議を聞いて、提宇子のあまぼし談議と名付たりしは尤なり。さて又諸神諸佛、惡魔降伏の義を顯さんとは、解脱同相の衣を、弓矢劍對の形に替て見せ玉ひ、擁護の御手をのべ玉ふとこそきけ、何ぞや、惡魔ルシベルを造り置さへあるに、アダン、エワを誑す時、加護をばなさずして科に落よかし、見て笑はんやうにして、あまぼしを食へば、忽ちハライゾテアルよりも追出し、アダン、エワは云に不レ及、一切の人間を地獄に入んとは、面オモに似合たる存分か、將た理の聞へたること歟。畢竟面はアダン破戒すべきことを知らざる歟。知らずんば三世了達の智にあらず、知りたらば慈悲の上より科カに落ぬ了簡を、アダン、エワオモに教へらるべき義なり。兔にも角にも提宇子の説、作りごとなる故に、不都合なること計なり。

五 段

提宇子の云、件のアダン、エワ犯科の後、死苦病苦を先とし、不如意不足なるを見、特には死して後インヘルノに墮在せらるべき難義を顧み、コンチリサンとて後悔を起し、今生の儀はさもあらばあれ、其身を初め、科を悔ひ悲まん者共の後生をば扶け玉へと、行住座臥、天に仰ぎ地に伏して是を禱られけるに、面オモ大慈大悲の上より扶け玉はんと思召すに、又憲法の上より、所當の科送らせ

よと請ひ玉ふといへども、人間の量りある身としては、相當の科送を成すこと叶はず。故如何とな

れば、アダン、エワの科量りなき科となれり。喩へば同じ手にて、人の面をうつに、相手の輕重によ

りて其科にも淺深あり。我より下輩の者を打ば、うちても苦しからず。同輩をうてば打て返す。上

輩にして、自然國主なんどの様なる人を打てば、其科重罪となりて、子孫末孫までも嚴科に處せら

るゝが如し。一本自然ノ下ノ字アリ量りなき面一本ズテヌニ作ルに對し犯せる科なれば、量りなき科送をなさずして叶はぬに、既に量りあ

る身となれば、人間の方より科送をなすこと叶はぬとて、其まゝさし捨玉へば、面の万事叶ひ玉ふと

云義又隱るによりて、慈悲憲法の二を万事叶玉ふ上よりかき玉はず。他ノ一本万華ノ上以テノニ字アリ面人骸を受玉ひ、御出世あり

て、人間の科送を成就し玉はんとして、天約をアダン、エワになされ、アダン、エワは是を承て子

孫に云傳へ、九百三十歳の齡を經、つひに死去せられし者也。一本シテテノニ作ル

破して云く、此は是平生人の諺に云ふ、切て繼番匠なり。好事もなきには如かじ。つげる事は是也

と云へども、此の是は本の無ことに劣れり。喩へば良材を間に合せんと思ひ、切て五間の虹梁に渡さ

んとするに、短くなれば又繼て其材を捐ざるも、工匠の良能なれども、長を短く切りそこなひしく

せ事は言語道斷なり。デウス面のアダン、エワをば善道に作りそこなひて、後又修補せんとの義、是に異な

らず。誰がやとふともなきに、なまじひに人間を作らんとて作りそこなひ、今此の衆苦充滿の身と

我等をなせること、さりとは、かたじけなからざる計ひなり。此等の理を有難と聞得て移らず、提字子の門徒は、下愚とも々々云に足らず。さてまた汝右に云、科は相手の輕重による故に、量りなき^{テウス}_{一本善ノ字ナシ}^{テウス}に對して犯せる科なれば、科も量りなき重犯と成て、量ある人間の科送をなすこと叶はずとは不審なり。あまぼし一を食ひし科も、^{テウス}に對して犯せば、量りなき科とならば、何ぞ又^{テウス}に對し、慚愧懺悔の心ありて、悔の八千度身を焦し紅涙に沈まん。善も量りなき善根とならざらんや。蓋し^{テウス}は人の善惡をばそだて、人の善をばないがしろにするの主歟。又惡は^{テウス}に緣じては増長し、善は^{テウス}に對しては滅亡するものか。此二對の内の理、汝必ず其一に居し、如^{一本シテレニ作ル}此底の義、逐一に是を論ぜば、天地を紙とし、草木を筆として書とも盡すべからず。愚且く一隅を擧ぐ。智者必ず三隅を反さふせよ。

六 段

提字子の云、右に説し^{テウス}の御出世のこと、天地開闢より大數五千年を經、セイザルと號する帝王の御宇に、ジユデヤの國の中、ベレンと云在所に於て誕生なり玉ふ。御母をばサンタマリヤ、御父をばジョゼイフと申す。但し此サンタマリヤもジョゼイフも、ビルゼンとて一生嫁婚の義無して、懐胎誕生し玉ふ。然を何として^{テウス}の御出世とは是を知ぞと云に、先の此のサンタマリヤは一生不嫁の徳

あるのみならず、諸善万行備り玉へば、讀誦觀念怠り玉はず。或時觀念の窓に向ひ心をすまし玉ふ。黄昏に及で忽然としてアンジヨ來現し、長跪合掌して、アベガラシヤベレナダウミヌステクンと申されしなり。此語の意は、カの愛相満々玉ふマリヤに御礼をなし奉る。御主は御身と共に在ますと云義也。此時より懷妊し玉ひ、十月満じて件のベレンに於て、夜半深更に及で既の内にして御誕生あれば、天人天降り、音樂を奏し、異香四方に散満す。此時奇瑞を以てカの御出世を顯し玉ふ者也。此御出世の主をゼズキリシトと申し奉る。御在世三十三年にして、衆生に善道を教へ玉ひ、御身カまて在ますと宣ふが故に、ジユデヨと云者の一類、是を聞て魔法也と云ひ、權門に訴へ、呵責打擲一本マナニニ作ルを加へ、終にクルスとて、はたものに掛奉る。是以て人間の滅罪生善の功德、アダン、エワの科送として、三十三の御年入滅を唱へ玉ひ、三日目に蘇生し玉ひ、其後四十日を経、上天を遂げ玉ひたる者なり。夫より以來、大都千六百年に及べり。

破して云く、デウスの出世、天地開闢より大數五千年に及ぶと云。是程其科送の遅かりしは、天地懸隔なる故に、遠路にして路次に年數を経たる歟。又旅の装ひ用意に歲月を経たる歟。五千年の間に科送なければ、一切世界の人間、地獄に墮べきこと無量無數なるべし。若干の者地獄に墮るは、偏に雨の降が如くなるべきに、其を見ながら哀とも思はず、五千年已來、衆生濟度の方便に心を傾けざ

るを慈悲の主と云んや。此を以て見るにも、提宇子の教は皆作り事なりと云義明か也。又年數に付ても甚だ不審あり、天地開闢より五千年にゼズキリシト出世と云ふ。出世より又千六百年、都合六千六百年なり。和漢傳記の年數に较量すれば、甚だ年數少し。蓋し提宇子の天地は、此天地の外、後に又別の天地出來たる歟。不審々々。又ジョセイフ、サンタマリヤは、一生不嫁の善人なるを父母とし、ゼズキリシト誕生と云。是何の至善ぞ。夫婦別ありとて、面々各々の嫁婚は人倫の常なり。常に反するをば却て惡とす。惡と云は道にはづるゝを云ふ。もし天下の人倫悉く嫁婚の義なくんば、國郡郷里人種を絶ち亡びん外何をか待ん。然る時には、常の道は善にして、此外は不善なること明白なり。又ゼズキリシト、天地の主と名乗らるゝが故に、一本ニハチンバニ作ルジユデヨの一黨、魔法なりと云て權家に訴へ、是をはたものにつけ、命をたちしと云。尤も是はさあるべし。詩に云、伐し柯々々々。其則不遠矣。いま眼前日本にて、汝提宇子の教は、聖人の道に背く魔法なるが故に、賢君是を退治し玉はんと思召し、百姓も又これを惡んで告げ訴へ、首を刎られ、はたものに掛られ、或は燒殺さる。先賢後賢、その政、符節を合するが如し。汝提宇子の教、邪法なること、一々猶後にことばるべし。さて又蘇生上天を説くこと貴に似たりといへども、根元邪法なれば皆魔法幻術なるべし。悟の前の是非は、是非共に是也。迷の前の是非は、是非共に非なり。正法の前の是非は、是非共に正なり。

魔法の前の是非は、是非共に魔なるべきこと、何ぞ猶豫に及ん乎。

七 段

提宇子の云、右の六段、この宗の教の専用なり。段々能く納得あらば、受法有べし。受法の後は十箇條のマダメント一本ノ下トノ字アリとて、十の法度、是を守らずんば有べからず。其第一には、デウス御一體を万事に越え、大切に敬ひ奉るべし。第二、デウス御名に掛て、空しき誓すべからず。第三、ドミンゴとて、七日め七日めを用ひ勤むべし。第四、父母に孝行すべし。第五、人を殺すべからず。第六、邪姪を犯すべからず。第七、偷盜すべからず。第八、人に讒言をなすべからず。第九、他の夫妻を戀慕すべからず。第十、他の財寶を濫望すべからずと云ふ、是なり。この内第一のマダメント、万事に越て、デウス御大切に敬ひ奉るべしとは、主人よりも父母よりも、此御を御内證に背く義ならば、主をやの命にも随ふべからず。身命をも惜むべからず。如何に況や其餘に於てをや。さて又受法の時、名をつくることあり。是は古御デウスの御内證に叶ひたる善男子善女人の名なるを、今面々につきて、其善人を尊前の御取成手と頼奉るべき爲なり。又塩をなめさする義あり。塩は味のなきものに味を付る物なり。其如く後生の味を今付るぞとの表式なり。又燈に手をかけさするは、眞の光を見付たりとの表式なり。さてエゴテバウチイゾインナウミネバチリスエツヒイリイエツスヒリツスサンチトの要文を唱へ、

額に水をかくるなり。此語の意は、阿の父、阿の子、又其兩間の大切の名に依て、我汝を洗と云義なり。其時ゼズキリシトのクルスより流し玉ふ御血の功德、此水に籠りて、即一切の罪穢を洗除して、其後自己の犯なくて、死せば上天の得果疑ひなし。又善人と云ふとも、此パウチズモの授を受ずしては扶かることなし。

破して云く、マダメントとて、十箇條の法度を説く。此十條の初條を除ては、殺生、偷盜、邪姪、

妄語、飲酒等すべからずと云ふ五戒を出ず。マダメントの第九第十は、心の濫望を制したる者也。不

飲酒の一戒も、万事心の亂を制せん爲なり。酒を吞、湯をのむも、吞に隔はなしといへども、酒は

亂に及ぶ物なれば、戀慕貪欲等の邪望も、酔へれば起るが故にこれを戒む。不飲酒の一戒は心をばら

らさじが爲なり。さて孝行すべしと説く。是は天下の道法なれば、汝提宇子、かたばかりに云ふと

見へたり。此段猶後に聞ゆべし。初條に阿の内證に背くことならば、君父の命にも隨はざれ、身命

をも輕んぜよとの一條は、國家を傾け奪ひ、佛法王法を泯絶せんとの心、茲に籠れるものなり。何

ぞ早く此徒に柄械を加へざらん。總じて至善の教戒は、民生日用彝倫之外に求ることを待ず。人倫

は其品繁多なりといへども五典に過ず。君臣父子夫婦朋友の其職分をつくさば、又何をか加へん。

又これを亂す者は、惡逆無道にして、犯さずと云ふことなし。君臣の職分には忠賞あり、父子の職分

他ノ一本蓋テ飲ニ作ル他ノ一本レノ字ナシ

他ノ一本道ヲ通ニ作ル

一本バノ國點ナシ

一本夫婦ノ下兄弟ノ二字アリ

は孝慈、夫婦の職分は別々の義、兄弟の職分は弟愛、朋友の職分は信なり。此五典の性を人に賦するは天命の職分なり。然を汝提宇子は云ふ、テウスマの内證に背く義ならば、君臣の忠義を捨、孝悌の因をも存せざれと勸むること、之に過る惡逆いづくに在べきぞ。其テウスの内證に背く義と云は、第一功を背て佛神に歸依することなり。故に提宇子の宗旨を替へ、佛神に歸依せよとの君命、さしもに重けれど、身命を惜まず、五刑の罪に逢ふといへども、却て之を悦ぶ。看よ々々、君命よりも伴天連が下知を重じ、父母の恩惠よりも、伴天連が教化猶辱けなしとすることを。日本は神國にして、天照太神より次第受禪し玉ひ、鷓鴣草膏不合尊に至り、其御子神武天皇、百王の太祖と成玉ひ、三種の神器、天下の護りと成玉ふ上、吾朝の風俗皆神道に依らずと云ことなし。又聖徳太子は權化の神聖にて在ませば、天照太神の御心を受て、吾國の道を弘め玉はん爲に、佛法を盛んにし玉ひしより佛國とも成れり。然を提宇子、時節を守り、日本悉く門徒となし、佛法神道を亡さんとす。神道佛法あればこそ王法も盛んなれ。王法在してこそ、佛神の威も増に、王法を傾け佛神を亡し、日本の風俗をのけ、提宇子、己が國の風俗を移し、自ら國を奪んとすの謀を回らすより外、別に術なし。呂宋、ノウバ、イスバニヤなどの、禽獸に近き夷狄の國をば、兵を遣して之を奪ふ。吾朝はさしも勇猛他に越たる國なるが故に、法を弘めて、千年の後にも之を奪んと思ふ志、骨髓に徹してあり。いぶせき

哉。マルチリとて、法の爲には身命を塵芥よりも軽くさすること、賢君天下を治め玉ふには、勸善懲惡の義あり。一本リナルニ作ル善を勸むるは賞、惡を懲すは罰、罰は命を絶するより大なるはなきに、提字子の命をたゝるゝをも恐れず、宗旨を替へざるは、誠に甚だ怖るべき者なり。此猛惡何國より起るぞと見れば、第一のマダメント、万事に越て、面を大切に敬ひ奉れと云より也。如し是邪法を弘むるは、偏に天魔の所行なり。此等の邪説巨細に擧て、上聞には達すべからず。君誠に聰明叡智に在ませば、一を聞召ても十を察し玉ふ。上より深く彼徒を戒め退治し玉ふこと傳聞く。昔日異朝の聖主、猛獸を退け、洪水を治め、民の居を安すんぜしめ玉ふ恩澤にも、勝れること百倍せり。一本猛ヲ怒ニ作ル猛獸洪水は色身の懼、彼の徒は眞を亂する佛敵法敵、特には國を奪んとする殘賊の徒なり。誰か之を惡まざらん。さて又、名をつけ塩をなめさせ、燈に手をかけさする體の義は、是非を論ずるに足らず。此ハウチスモの授を受ざる者は、善人とても刃デウス扶けられずと云。此理聞へず。授を受ぬ者とても、善人ならば何に依てか罰を與ふべき。大明に無私照、大親に私親なしとこそ云なるに、是は吾方さまのもの、是は我心に叶ひたる者など云ふ、私ある底の刃デウスならば皆人間の氣なり。人間の氣を以て天命を量る、甚だ無學の至なり。

右は是、提字子七段の談義の所詮を擧て論じ畢ぬ。予本より才短かければ、論談の答話、諒以淺近

なり。蓋し問に答處あり、答に問處あること常の法なり。智者之を笑こと勿れ。又左には問にか、はらず、平生のことを書いて夜話となすものなり。

或云、其以てする所を視、其由ふ所を觀、其安ずる所を察すれば、人焉ぞ度さんや、人焉んぞ度さんや。

孔子宣ふと聞く。然れば提宇子の伴天連、平生の受用如何かある。答て云く、惣じて寺と云

ば何れも寺法なくて叶はず。寺法と云へば惡きこともなき物にてそろへば、提宇子の寺にも朝夕の

勤行あつて、朝の勤をばシイサと云て經を讀む。又ヲスチャとて、小麥の粉にて南蠻煎餅の如くな

るものに、要文を唱ふれば、ゼスキリシトの眞肉となると云。又ぶ萄の酒を銀盞につぎ、同く文を

唱ふれば、ゼスキリシト眞血となると云て、彼煎餅を食ひ、而して右の酒を呑むつとめの候。小麥

のせんべいがゼスキリシトの肉となり、葡萄の酒が血にへんずると云こと、人の信用に足ざること、

又有難き行ひとも見候。さて慢心は諸惡の根元、謙るは諸善の礎なれば、謙るを本とせよと人には

勸むれども、性得の國の習ひか、彼等が高慢には天魔も及ぶべからず。此高まん故に、他の門派の

伴天連と威勢争ひにて喧嘩口論にをよぶこと、世俗もそのけにて、見苦しきこと御推量の外と思

召せ。餘りのことに天川にては確執にをよぶ。此七箇年以前のことにやらん傳承る。バレンチイノ

カルワリヨと云ふ伴天連の總司、棒ちぎりを横たへ、先をかけて他寺を推寄る上、イルマン同宿、我

さきにと面々道具を携へ、寺中へをしこみ、高樓の上より、鉄鉋を放ち掛などする迄にありしと申す。出家としての上にて、是の如きの振舞は似合ぬことにて候はずや。

或問ふ、南蠻人と日本人とのあるさつ、寺中にて何とかある。答て云、夫も右の物語にて御推察あるべし。他ノ一本フヲ曰ハ三作ル

高まんなる者共なるが故に、日本人をば人とも思はず。去によりて日本人も又是をすまずと思ふを以て、眞實あいさつのよきことも候はず。其上日本に住する伴天連、イルマンのはごくみをば、南蠻の帝王より繼らるゝに、日本人は何としても我本意に叶ふべからず。向後は日本人を伴天連になすこと勿れとの義にて、皆面白くも存ぜず。此本意に叶ふべからずと云は、何としたる心持にてあらんと云ふことは、御推量あるべし。日本をねらふに、國人は何と云ふとも、國の最負あらんと思ふ故と思召せ。

或問、總じて提字子は無欲にして、慈悲を本とすると聞。誠なるか。他ノ一本或ノ下人ノ字アリ

答云、無欲貪欲の際は存ぜず。檀那を貪り、金銀に目をくるゝこと、彼等より初まりたることにて候。たといあの檀那は戒法をもよく守り、善人と譽れども、貧者なれば、そこ他ノ一本無ノ上アシクノ三字アリにあしらい、無信心なる破戒の者といへども、富る人をば馳走奔そらし、大檀那にてもをちぶれたる時は見たる者かともせず。さてまた慈悲にして嚫施を本とすると云へども、皆名利の爲にして、さりとはと奇特

一本皆ノ下是ノ字アリ

がられて門徒を付ん爲にすることと思召せ。

或問、提字子の伴天連は、餘の義はさもあらばあれ、邪姪の道一本道テノ下バノ字アリをよくきりたりと云は如何に。

答云、是は人によりてさもあるべし。人によりてと申すにて御分別まいるべし。日本にてはまだ耻るによりて、此等のことも十分が一と聞ゆ。呂宋、南蠻、ノウバ、イスバニヤなどにては、三冥をさかいたることと、人の語るを承る。別してケレルゴと云伴天連などは、妻對妻方の女に子を持つと申す。但し子を持は名に應じては本意とや申すべき。伴天連とは父と云詞なれば、子無しては父の義理立がたかるべきにや。

或問、提字子のコンヒサンと云ふは、何としたる因縁ぞ。

答云、さることにて候。ゼスキリシト在世のベイトロと云第一の弟子に、汝地にて赦すべき科をば、我天に於ても赦すべしとの約ありし故、一本ノ下時ノ字アリコンヒサンと云義は始りたりと云。去ればコンヒサンの時は他を近附ず、我と伴天連と唯二人相對して、山賊、海賊等の義をなし、若は父を殺し母を殺す五逆罪、國家を傾んとの謀反々逆等の大犯なりとも、残らず懺悔するに、伴天連これを聞て赦せば、其罪消滅すると云ふ。さりとは魔法にて候ぞ。國家を覆す程の大逆をも、伴天連聞て赦せば、其罪消滅するぞと教えるは、偏に科を犯しても苦しからぬ物ぞと弘むる同前なり。是を以て見

る時は、伴天連は殘賊の棟梁、謀反殺害人の導師とも云つべし。兎にも角にも、いやなる宗旨と思召せ。

或問、提字子の宗旨には奇特多く、別してマルチルと云て、法の爲に命を捨る者共の上にては奇瑞多と聞。實否如何が候や。

答云、其事にて候。何事も聞ては千鈞より重く、見ては一兩よりも輕き習ひと思召せ。彼徒奥深きやうに申せども、左も無候ぞ。我等も十九出家の後、彼寺に二十二年も修行を經、人の數にもかぞへられて候が、何にても奇特なることは一も見ず候。又マルチルの上にも何にても奇瑞を見ず候。

總じて新しき宗旨建立の初には、邪正を糺して初祖を逼迫せしむることある習にて候。喩へば、高

祖日蓮聖人は大難四度、小難數を知らず。法の爲に浮沉に及び玉ふ内に、鎌倉にては相摸守の下知

にて、高祖の頭を刎んと敷皮の上に引居られ、既に太刀取、白刃を提げ、後に回り太刀を振揚んと

すれば、靈光、高祖圍み、刀刃段々と成て、太刀取の目くれ、はなぢ颯たつて地に倒る。其外、殿中も電光

の如く輝きわたる靈夢等の奇瑞によりて、聖人權者にてもましますこと露顯して、相摸守も驚か

れ、刑戮を止め玉ふ。猶委くは傳記に在べし。加様の奇瑞有て、弘通の處、正法たる義を徹し玉ひて

こそ、濁世末法の今にも人皆渴仰の首を傾け候へ。邪法を弘る伴天連誅戮に行はるれども、奇も瑞

他ノ一本ノチニ作ル

も見えず候。但し此七八箇年以前のことにやらん、去人の語られしを承る。長崎にて伴天連誅戮せられしに、屈み居たる伴天連共、又は門徒ども、すはや奇特も在べきぞと思ひ、内々心を空になして居たるに、長谷川佐兵衛尉藤廣、御代官として長崎に在て、彼徒がみこゝしく童部らしきことを能く知りたるによりて、彼等を欺んと、童部共のもてあそびの烏賊旗のぼりとやらん云物をこしらへ、其上蠟燭をもやし、宵すぎたる程に、糸をひかへ、風に乗じていなさと云ふ所より長崎の上へ揚げしに、伴天連も、門徒の者共も、すはあれを見よ、云ざることか。白雲一村たなびきて天より光明の下り玉ふことをと、のゝめきあへるに、佐兵衛は微笑し、知らぬ貞にて居られたりしかども、次第に此事隠れなかりしかば、欺かれしことを無念とは思ひながら、なきねいりに成たると承る。加様のことをマルチルの奇特と申すべきは存ぜず、別に珍らしきことは見たることも聞たることも候はず。

或云、如し此提宇子の宗旨を裸になさば、左こそ彼徒の惡み深く候らん。

答、仰の如く其段は御推察有べし。初て寺を退し砌、彼等に路次にて、自然は行逢て、何かと云はんも無心に存、彼宗のなからん所へと存、南都へ打越罷居て候ひしに、折節仕合の惡きにや。其比大久保石見、彼地の御代官にてありつるか、其下代の者として、提宇子にて候しに、我等の義を伴天

他ノ一本答下云ノ字アリ

一本モヤラトモニ作ル一本スギタルヲ過ルニ作ル

一本數ヲ野ニ作ル

連、彼が許へ訴へ遣し、闇打にもせよと云しに依て、左あるべき由を告げ知する者候し間、危邦には居らずとさへ申すに、況や自己の危き所をば退かざらんやと存じ、木津川より船に乗り、枚方の上、中宮と云在所に行き、暫く其所に隠居致し候ひき。其後も覘ひたるように承れども、さすが治まる御代には、猥に宿意も遂げ難きにや、さることも候はず。融の諷にて候か、秋の夜の長物がたりよしなや。先いさや、汐を汲んと翁の申せし節に、無益の長物語に夜を深して候。件の如の事を申さば、誠一本サラセニ作ルに秋の夜の千夜を一夜になし語るとも、詞は残り夜は明け候ひなん。万事は御推察あるべし。

元和六庚申曆孟春

ハピアン誌之